



Title	D.H. ロレンス 『翼ある蛇』 -肉体の宗教-
Author(s)	富永, 昭
Citation	明治大学教養論集, 88: 84-103
URL	http://hdl.handle.net/10291/8971
Rights	
Issue Date	1974-03-01
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

D. H. ロレンス 『翼ある蛇』

——肉体の宗教——

富 永 昭

I ケイトとメキシコ

ロレンスの一生を貫いて流れる文学活動の中核は宗教の根源を精神から肉体に置き換える事であった。ロレンスはあらゆる自己の文章を通じて肉体の本質を描く事によって肉体が精神の上に位置する事を説いて来たと言う事ができる。だが、そこで宗教という、全人類、或は少なくとも一民族の総体にかかわる視野を持つものを説くに当って、個々の人間の肉体の実体を描く事だけでは満足しきれぬ感があつたであろう事は想像に難くない。宗教とは一民族を対象とした啓示、祭祀、救世主等を必要とする側面を持つからである。

『恋する女たち』によってロレンスは、現代の世界の総体を自己の観念に照らして、一つの高度な認識に達していた。同時に、個人の救済を人間全体の救済によって裏付けねばならぬという欲求も高い緊張状態に達していたのである。『恋する女たち』以後の『アーロン杖』、『カンガルー』から『翼ある蛇』に至る作品の背景となる世界の地理上、題材上の内容の変化拡大はそれを物語っていると言えるであろう。

『翼ある蛇』という奇怪な作品がロレンスの手から成った裏には以上二つの内的必然性を見る事ができる。その完成度は別として、この作品では一民族に於ける神の啓示、救世主の出現、祭祀に集う民衆が描かれている。その中で個

人としての人間の魂がどういう動きを見せてゆくかが物語の動きの一つになっているのである。

作品の舞台が何故にメキシコになっているかは、ロレンスがその地での体験によって自らの宗教的情念を語るのに最も適当であると考えたからと言えは足りるであろう。それはロレンスのメキシコの民衆や風土に対する筆致の見事さから充分納得させられるのである。

ロレンスの思想の代弁者と思われる作中の人物、**Don Ramón** の言葉を借りれば、「メキシコの魂は愛の翼故に重苦しいものとなり、彼等は絶望の石を呑み込んでしまった」のである。(ペンギン・ブックス、p. 240。以下同。) ここで、愛の翼とはキリスト教の意であると考えられる。絶望の石とは、文明から取り残され、宗教上の真の救世主を持たない儘に歴史を経てしまった事を意味すると考えてよい。ロレンスはキリスト教の如き靈の宗教を本質的なものと考えていなかったが故に、キリスト教以前の原初の人間の姿を残している地に舞台を置いたのだと考えられる。しかも、キリスト教が紹介されていながら、それによって民族が救済され得ないで今だに原初の姿を残して呻吟している姿をメキシコに見たのであった。

メキシコの人物や建物等をロレンスが風景の中の点景として描写する時、彼は単なる外面の描写に終らず、その背後にある目に見えない時間と空間の視野の中に置こうとする。ロレンス自身の観点が強烈に登場人物の視点に作用してメキシコの隠れた時間の厚みと空間の奥行きを読者に印象づける。

湖畔には遠く遥かに人々が小さく、白いしみの様に動いていた。白いしみの様な人間がロボのかすかな埃りの後を追っている。彼女はしばしば何故メキシコの風景の中では人間が小さなしみ、生命の小さなしみの如くなるのだろうと考えた。(p. 170)

湖の彼方には青っぽく森に蔽われた山々が聳えていて、村の家々が白く点々としていた。はるか遠く朝の 대기の中でそれは異った世界に、異った

生命の中に、異った時間の様式の中に存在している様であった。(p. 172)

これがロレンスの見たメキシコの「永遠に何かを持ち望んでいるかの様な人間」(p. 172)と、「すべてが何か遠い時間の中にあるかの如く静かで疎遠な風物」(p. 171)の遠景である。まだ地上に生まれ出ていない人間とその生活を時間の霞を通して見る様な印象を読者に与える。

女主人公 Kate は將軍 Cipriano にメキシコ人の事を次の様に言う。「あの人達の眼には真ん中がありません。……本当は存在していないのです。中心、つまり本当の自己がないのです。まるであの人達の真ん中は大渦巻の真ん中の様に荒れ狂う黒い穴なのです」(p. 46)。ここで Kate のいう本当の自己 (real I) とは西洋人の考える自我とは違ったものを指していると考えて良い。彼等は生まれたばかりの人間の様に自己を成長させていないのである。Kate の眼には彼等は創造半ばの人間に映るのであり、人間の中心部たるべき魂を持たない人間らしく平然として虚無の中に生きている。個々の人間として完成された魂を持たない彼等は「混沌の中から魂を勝ち取る事も出来ず、かと言ってその他の物もすべて勝ち取る気持もない」(p. 150)。言わば彼等は「運命の中に孤立した」儘 (p. 162)、「倦怠の生み出す恐ろしい昏睡」(p. 156)の根にからまっているのである。そうしたメキシコ人の本質を恐ろしい程に感じさせるのは Ramón を襲撃して殺された男達の描写である。

彼等は顔に死の嘲笑を浮べて死んでいた。それぞれが皆生命に溢れた男達だったのだ。それなのに死んでもどうという事はない男達なのだ。不気味だったが死んでいる事をどう思っているわけでもないのだ。彼等は空虚な存在になっていた。恐らくは生きている時からその見事な肉体の中には或る空虚さ、虚無がひそんでいたのだ。(p. 318)

こうした個々の人間の確立した魂の欠落したその生き方を助長するのがキリスト教の教会であると、作者ロレンスは Kate に感じさせている。教会は彼等

が自己の魂を把握する助けをせずますます彼等を弱者意識に溺れさせていると言う。「自分を犠牲者だと感ずる事に不潔な官能的満足感を覚え、同時に、結局は犠牲にされる者の方が犠牲にする者に勝つのだという冷笑的な意識を内にひめているのだ」(p. 289)と *Kake* は思う。こうした魂の欠落した柔弱さが、彼女に激しい怒りを感じさせた湖畔で水鳥をいじめる少年を日常の姿にしてしまう。そこには、彼等の反抗、卑屈、不遜、暴虐等の不快と恐怖を超えた、生命の芽生えへの無神経という許し難い悪徳が根を張っているのである。「メキシコについて真剣に話し合おうとする人々すべてに襲ってくるらしいあの宿命と絶望の感じ」(p. 42)の根源は恐らくここにあるのであろう。メキシコ人は希望を持つ事を頑強に拒絶するのである。

だが、*Kate* が反撥を覚えるメキシコ人の、沈黙の中に抑えられた生命を包む風土も彼女の反応に輪をかける。*Kate* が *Ramón* と初めて会い、*Cipriano* と初めて親しく話し合う *Norris* 夫人の邸宅は次の様に描かれている。

四角い中庭は片側のどっしりしたアーチに陽が当たっているのに薄暗く、赤や白の花の咲いた鉢が置いてあったが、その重苦しい感じはあたかも既に何世紀も死んでいるかの様であった。或る死んだ重苦しい力と美が、逃げ去る事も、自由になって分解する事もできずに、あたりに漂っている様であった。石桶には澄んだ儘じっと動かない水が溜っており、その中庭を土台の所が暗く蔭になった赤っぽく黄色の重々しいアーチがあたかも戦士の様な宿命観を与えて取り囲んでいた。(p. 37)

ここでは赤や白の色鮮かな花も重苦しく暗く沈んだ石の下に奥深く咲いているかの様である。澄んだ水も時間の積重ねに押し潰されそうな空気の中で沈黙を強いられているかの様である。ここにも抑えられた生命の沈黙が支配していると言ってよいであろう。だが、そうした時間と空間の中に幽閉されかの如き生命の要素をより全民族的、より全風土的に象徴しているのが山々の姿であろう。全民族、全風土の抑えられた力が太古の恐怖をもって眼には見えない震動

を続けているのである。

この二匹の怪物は恐ろしい巨人の様に、人間の壮麗な血腥い揺籃たるメキシコの谷間を見渡していた。白く宙に浮ぶ二つの山は超然と重々しく深い響音を発しているかの様であった。それは耳には聞こえぬ程深く、血によってのみ聞き分けられる恐怖の響きであった。雪をいただいたヨーロッパの山々の様な聳容とした、高揚させる様な、崇高なところはなかった。重々しく白い肩をし、恐ろしく大地を押し、眼を怒らせた二頭のライオンの様に唸る重みなのであった。(p. 55)

Kate は以上いくつか例を挙げたメキシコの間人風土に異様な恐怖と神秘を覚えるのであるが、その恐怖が神秘に押されてゆく過程が彼女自身の内部の変化と平行しく動いてゆくのだと見てよからう。見慣れぬものへの恐怖が神秘に変わってゆくにはその恐怖を与えるものの中に自己の持ち合せない力と美を発見してゆく過程がなければならない。**Kate** はヨーロッパ人として培ってきた自由な自我に照らしくメキシコを見、それに反撥する自分を固く信ずる人間である。と同時に、その自我の行きづまりを意識してメキシコを旅する人間でもある。その二律背反の中で彼女は苦しむのであるが、神秘に強く惹かれてゆく彼女の本質の中心にロレンスは原始以来のアイランド魂を据えている。ヨーロッパ人としての普遍性とアイランド人としての民族性という二つの要素によって彼女は動かされるのだと見て良からう。

Kate がメキシコに希望を抱き始めるのは勿論ケツァルコアトル 帰還のニュースを読んでからの事であるが、既に感じていたメキシコの恐怖の中に個々の人間を越えた生命、時間を越えた魂を無意識のうち感じていたと見る事ができる。例えば売り物のオレンジをぼつねんと磨いているメキシコ青年の姿を彼女は次の様に見ている。

奇妙な美しさ、肉体の一種豊かな在り方、内にひそむ重々しい血の力、

救い様の無さ、宿命的で魔力的な深い不信感。この世のあらゆる自由、あらゆる進歩、あらゆる社会主義も彼の救いとはなるまい。いやむしろ、更に彼を滅亡させる手助けとなるだけであろう。(p.58)

無論、Kate の心の中にはこうしたメキシコ人のどうしようもない倦怠への絶望があるのだが、同時に彼等の持つ人間や時間を越えた美しい生命が覚束無げに浮遊している姿も眼に映っている。その美しい生命は余りに無力で孤影悄然としすぎていて神秘と自覚して信ずるには余りに頼りないのである。だが、ロレンスがこの作品の舞台をメキシコに定めたのは単にケツァルコアトルという宗教を見聞してからではない事は明らかであって、メキシコの人間や風土の中に秘められている太古の生命がその土台として動いているからなのである。個々の人間に宿っている生命だけではなく、個々の人間の反抗や忿怒までが個々の人間の次元のものではなく、それを越えた時間と空間の流れの上に乗っている。Garcia という若い大学教授の忿怒の中に Kate はその言葉の意味する内容よりも彼という人間の在り方から受けるメキシコ全体の底流となる忿怒を感じ取る。

彼の内では、自然な柔かい官能的な流れと、重苦しい忿怒と憎悪と、その二つの気分だけが曇った日の日蔭と日向の様に素早く否応なく連続して交互していたのだ。彼の好感を与えるところは、感情の複雑さにも拘らず素朴である事、又、彼の忿怒が個人的なものではなく、個人を、彼自身をすら越えたものであるという事であった。(p.62)

ぼつねんとオレンヂを磨く青年と言葉を連ねて怒りをぶちまける青年の二人はいずれも個々のメキシコ人及びメキシコ全体の神秘を Kate の中に感じさせていた筈なのである。同じ事は Norris 夫人の邸宅にも巨大な二つの山にも言い得る。「限定された意味や一つの固定した内容の神には死ぬ程退屈していた」(p.64~5) Kate のアイルランド精神が呼び起されて、完成されたものとして

固定していた自我を突き破り始める事によって彼女はメキシコの恐怖の中にひそむ神秘を見つめ始める。その契機となったのがケツァルコアトルのニュース記事であった。神々の再現という衝撃によって彼女は、「彼女の精神の中にメキシコがもたらしたあらゆる苦々しさの中には、今なお殆んど希望とも言える驚異と神秘の不可思議な輝きがあるのだ」(p. 64)という認識に至るのである。と同時に彼女の再生が始まる。というより、彼女の西洋的自我とケツァルコアトル教を支えるメキシコの神秘の力とが彼女の中で葛藤を始めるのである。

Ⅱ ケイトとシプリアーノ

間もなく Kate はケツァルコアトルゆかりの湖へ出かけるのであるが、その前にロレンスは Cipriano と彼女との間の関係を更に強める場面を置いている。Cipriano と彼女との関係は本質的に性を媒介とするものである。Ramón の邸での談話の中で同席者のメキシコの男達の大胆な性についての議論に圧倒された彼女は、「自分は男達の前に立っているのだ。この男達は死や自己犠牲ではなく、生命の問題に立ち向っている。生まれて初めて自分が知っている世界を越えて、彼女自身の深みを越えてゆこうとしている男達への殆んど恐怖とも言える苦痛を感じた」のである (p. 73)。交際の瞬間の奇蹟を語る男達の前で彼女は、「その瞬間に多くの事柄が危機に達する事があり得る。人間の希望、名誉、信念、信頼、生命と創造と神への信仰、これらすべてが交際の瞬間に危機に達する事がありうる。これらはその子供に連続して受け継がれてゆくだろう」(p. 72) という Toussaint の言葉に同意の言葉を返しなが、燻った焔の眼に囲まれた自分に気付いてはっと苦痛を感じるのである。その時 Kate は自分に注がれている Cipriano の視線を意識する。彼こそメキシコの男達の力強い象徴なのである。抑えられたメキシコの男達の生命が彼の中に沈黙の裡に煮えたぎっている。「血管の中に爬虫類の血が重く波打っていると思はせる何か滑らかな未開の、しかも活力に満ちたもの」(p. 74) が彼の中に感じられる。Kate は恐怖と共に、「蛇に睨まれた小鳥の様に」(p. 74) 彼に惹きつけられてしまうのである。これは恐らく Kate のメキシコに対する反応の象徴なのであ

った。恐怖と魅力、彼女はその間に行きつ戻りつするのである。ロレンスに従えば、恐怖は彼女のヨーロッパ的自我が感ずるもの、魅力は彼女のアイルランド精神が感ずるものと言えよう。

Cipriano の Kate にとっての意味は、彼女の悲痛な過去を聞いた彼が少年の頃聖マリアの像の前に坐した時の様に神秘の女神に対するが如く対した事によって更に深まる。この時既に彼女はケツァルコアトルの洗礼を受けていたのだと言って過言ではあるまい。思えば物語の冒頭、闘牛場というメキシコの悪疾から彼女を救ってくれたのは彼の陰うつさの中にひそむ素朴さなのであった。

湖上での Kate は先ず雇った船頭に対してからそれまでのメキシコと違った印象を受ける。その思いに沈んだ様な美しさと逞ましい体力とに、「どうしてこの国をあんなに苦々しく思っていたのだろうか？」と自問する (p.97)。夜明けを迎えた湖上の空気を Kate は次の様に感じている。

大地も大気も湖水もすべてが新しい光を受けて静まりかえり、夜の最後の青さがまるで息吹の様に溶けてゆく。物音一つせず生命のきざしもない。この偉大なる光は生命そのものより強いのだ。(p.98)

これは夜と昼の中間にひそむ地上の生命を越えた神秘の瞬間を捉えた描写である。ロレンスは人間の存在、特に男女の存在を宵の明星と夜明の明星にしばしば Ramón を通して象徴させている。Kate がこの瞬間にその沈黙の力強さを感じるのは作者ロレンスの深い意図によるものであろう。現にその直後、Kate は船頭と水中から顔を出してケツァルコアトルへの捧げものを要求した男の両眼にその沈黙の力強さを見るのである。その視線は以前にも彼女が見たあの中心のない視線であった。だが、今の Kate にはそこにメキシコ人の特質の力を感じずに至っている。それは「諸々の現実の間に懸った異様に輝く遠く遙かな」視線であり、「世界の力強く羽搏く二つの活力の翼の間に浮んだ」人間の眼差しであり、「細胞の中で静かに浮んだ儘輝き合っている核の様にあらゆる生命の震動の傷つきやすい中心」からくる眼差しであった (p.100)。Kate

は勿論そこに、生きた人間の視線の中に、宵の明星と夜明の明星の神秘の光を
実感するのである。ロレンスが舞台をメキシコに定めた最も大きな理由の一つ
に彼の理想とする人間の在り方を象徴する眼差しをメキシコ人の中に見出した
事が挙げられよう。

だが、その眼差しの中にある実体を **Kate** が把握したわけではまだない。又
彼女がヨーロッパ的精神の自我が感ずるメキシコへの恐怖心を克服し得ている
わけでもない。彼等の視線にある神秘はまだ完全に生まれ出していない未開の人
間の持つ、善悪いづれとも分らぬ不安を彼女に感じさせる。彼女がこの時獲得
しているのは、「何らかの人間的接触をまだ失わさせないで欲しい」(p. 113)と
いう願望と、「各々の個人が完全な自我、完全な魂、完成された自己を持って
いると考えてきた」事が幻想であったという認識である (p. 115)。メキシコ人
の持つ生まれかかった人間の姿は彼女に、メキシコに恐怖を覚えるのは完成さ
れたものという幻想に固執していた自分の古い魂なのだと教える。少なくとも
彼女の恐怖の一部は彼女の持っていた魂の埒外に真の新しい生命がある事を認
める恐怖であった。新しい生命を求めてヨーロッパを捨てたつもりでいなが
ら、その新しい生命の可能性を感得すると同時に古い自我を捨てねばならぬ事
に恐怖を感じるころに彼女の心の葛藤の一面があったのである。だがここで
Kate はそうした認識の上に立ってメキシコの可能性に心を開かんとする事に
よって一つの関門を突破したのと言えよう。

Kate が古い自我を捨てた世界を知るのはケツァルコアトルの群衆の踊りに
加わる事によってであり、そこに感じられたものは新しい性の意識であった。
ケツァルコアトルの踊りは大地を踏みしめる事によってその奥深くの生命に帰
るという意味があった。彼女は既にその意味とその力を知っているのだが、大
地に引きずり込まれる精神の恐怖への反撥で踊りに加わりとうしない。だが、
一人の男の誘いに乗って、「催眠術にかかった様に」(p. 139) 足を踏み出して
ゆくのは、単なる彼女の好奇心でも偶然でもなく、抵抗しよう無の宿命を彼
女が宿していたからに他ならない。

この体験によって彼女は処女性を回復した事になるのだが、夜と昼との中間

に浮んだ星の様な中心のないメキシコ人の視線の奥から彼女が獲得ものがそれであった。その間の彼女の実感は、「自分と男性との間に、自分の女性としてのより偉大なる自我と男性のより偉大なる自我との間に暁の明星の如く漂う接触の火花と共に、欲情を越えた欲情に没入し、肉体の利己主義を越えた肉体の中に入り込むとは何と不可思議な事であろうか」(p. 141)とされている。そして、「この神秘の中に沈まねばならない」と考えるのである (p. 142)。

肉体の利己主義を越えた肉体とは Cipriano につながる道である。ここで Kate は彼と結びつく準備を略完成したと言う事ができる。それは本質的にはメキシコの本質に対するヨーロッパ的精神の感ずる恐怖を彼女が克服した事を意味している。そうした精神の自我を越えた大きな自我を彼女は認識し、それに身を委ねる体験を既に経ているからである。だが別の視点から見れば、それは彼女にとって人間の原初の姿に立ち帰る事であった。全面的にそうする事なしにメキシコに没入する事は出来ない。彼女にメキシコの神秘の扉を開いてくれたケツァルコアトルの踊りにはメキシコ人の野蛮性の裏付けがあり、その野蛮性の内包する暴虐、悪徳をメキシコの一部として是認せねば、Kate の行為は他人の美点を利用するだけのものに終わってしまうであろう。彼女はメキシコ人の持つ個人を超越した憎悪と獐猛さの混沌とした本質を自分の体験した神秘の中に包摂してゆかねばならない。それを切り捨てたところに神秘の美しさは実在し得ないのである。Ramón を襲撃した男達を処刑する Cipriano を結局が Kate 是認するのは本質的にはこうした彼女の認識によるものと言えよう。ロレンスは用意周到にそうした Kate の恐怖心を、精神ではなく肉体の恐怖、血の恐怖と呼んで、彼女がそれを克服するエピソードを挿入している。暗闇の中で扉の門を引こうとしている男の腕を見た時がそれである。

その奇怪な言い様のない恐怖は彼女にとって苦痛の極みであった。それは彼女の全身の力を奪い、彼女の心臓を握ぎ取ってしまったのだ。激しい夜の恐怖の中で彼女はぐったり倒れていた。蠟燭は薄暗く燃えている。遠くかすかに雷鳴が轟いた。夜は恐しい、恐しい。メキシコは彼女にとって

筆舌に尽し難くすさまじいものであった。(p. 146)

この時彼女を救ったのは次の様な考えを自らに言ってきかせる事によってであった。「我々は古い糸を拾い集めに立ち戻って行かねばならない。万策尽きた今となつては我々を再び宇宙の神秘と結合させてくれるあの古い打ち碎かれた衝動を取り上げねばならないのだ」(p. 147~8)。これは無論、ケツァルコアトルの踊りによる神秘の体験の上に立って初めて可能な事であった。だがこの体験は、単なるヨーロッパ的精神による恐怖ではなく、太古の存在に還る事に必然的に付随するより根源的な意味で人間的な体験なのである。Cipriano はその肉体的存在そのものによってあらゆるメキシコの神秘を代表する実体である。Kate はここで彼の存在の仕方の意味を理解する鍵を握ったのだと言えよう。

Cipriano が初めて Kate に結婚の申し出をする時、彼は、「あなたは涼しい朝様に非常に新鮮なのだ。メキシコでは暑い乾いた日が終ろうとしている」(p. 199) と言う。彼の欲情には対象を求めて安定を得ようとする幼い覚束無さがひそんでいて、Kate の精神の自我を越えて彼女のメキシコで生まれた処女性に結びつく力を持っている。彼女がケツァルコアトルの踊りの中で感得したものを彼は全身に保有し、従つてその中にはメキシコの恐怖も処女性も混沌として存在している。彼が結婚を申し出る直前に、「何故白人はいつも平安を求めようとするのです？」と彼女にたずねるところがある (p. 198)。精神の平安を得るという事は白人の生き方の一つの窮極の目標である。だが、Cipriano の中には戦闘を本質的に希求する素質があつて、それは歴史に取り残された未開の人間の中に必然的に存在する素質に他ならない。彼は Kate によって全き平安を得ようというのではなく、彼の存在の一部に自然な均衡状態を得ようとするだけなのである。Kate を得ても彼の戦闘の本質は緩和される事も中和される事もない。Kate は体験によってその事は既に認識している筈である。「もしよろしければ私と結婚して欲しい」(p. 199) という彼の言葉に、「彼女はざっと紅潮し、息づまる様に胸が高まり、意に反して顔には暗闇からの輝きが飛

び散った」とロレンスは書いている。この時彼女の中には古い自我の残滓が働いているのだが、ロレンスの使う「暗闇からの輝き (dark flush)」という表現の中に、Cipriano の欲情が Kate の本質的な欲情を眼醒めさせた事が暗示されていると言う事ができる。

Kate が Cipriano の肉体の在り方を、「彼の存在からは外部のもの一つになろうとするものは何も発せられない。外部の世界には全く関知せず、唯すべて自己目的の中にあっただ」(p. 214~5) と感ずるところがある。これは彼が彼女の持つ様な自我によって動かされていない事の意味であり、彼の中にあるメキシコの相互に矛盾する多様な素質が全体として自己目的に従って動いてゆく盲目の動向を彼女に感じさせるのである。だが、彼女の彼に対する不安感の奥底にそれを乗り越える事の本質的な意味を見出すのは、彼が自分や Ramón と一緒にメキシコの生きた神になる事を提案した時であった。その時初めて彼女は自分にとってのメキシコの意味とメキシコにとっての自分の意味とを女神という象徴によって暗々裡に感得するのである。彼が単に自己の我意を彼女に押しつけているにすぎないのではないかという自問を繰り返しながらも、彼女はメキシコに於ての最も決定的な自己の真理をつきつけられる。

彼女は衝撃に息もつけなかった。というのは、彼によって彼女は自分の肉体に彼と結婚する可能性がある事を否応なく知らされていたからであった。それは以前には一瞬たりとも目に映らなかったものであった。だが勿論、勿論彼と結婚できるのはこの私自身ではなかろう。私の中にある何か奇妙な女性なるもの、私が知りもせず掌握してもいないものなのだ。(p. 249)

この衝撃の反動として、ロレンス特有の、特に女主人公に見られる精神的自我の凝固という現象が Kate の中に起る。肉体や官能の未知の世界の前に自我が消滅させられる事に対する恐怖心によって生ずるものである。彼女にとってメキシコの恐怖が最も純粹に最もさし迫って振りかかろうとしているのであった。彼女は白人の世界に逃げ去ろうという衝動に駆られる。だが、その翌朝の

Kate をロレンスは、「奇妙な事に彼女は翌朝新しい力を感じながら眼を醒した」(p. 251) という風に描き、新しいケツァルコアトル讃歌を繰り返し読ませている。湖辺のメキシコの生と死の交錯した光景の中で彼女は Ramón に会いに行こうと決心する。

Ⅲ ケイトとラモン

Ramón はスペインの血を持つ人間とされている。初めて彼の顔を見た時 Kate は「真直な眉の下の両眼にはいく分傲然としたところがある」(p. 44) と感じている。Norris 夫人の邸宅で Kate と Cipriano がメキシコについて談議をしている時に、彼女のメキシコ観を耳にして、「あなたはとても賢いお方ですな」(p. 46) と背後から声をかけるのが二人の間の最初の言葉である。

そう言う Ramón の表情の中に、「かすかな冷笑を含んだ微笑」を Kate は感じ取る。「本質的にヨーロッパ人たる二人は、即座に互を理解し合った」(p.46) とロレンスは書いている。Ramón にとっては Kate の談話中の言葉がその鍵となり、Kate にとっては Ramón の傲然とした表情と冷笑を含んだ微笑とがその鍵となった事は言うまでもない。「死万才 (Viva la Muerte)」こそメキシコ人の本質だという Ramón の言い方の中には、それに対してヨーロッパ人である Kate が感じるに相異なる恐怖と嫌悪の念を予知している事が察せられる。Kate の反撥の答えに彼は、「だが、あなたが本当のメキシコ人になられたら」と、「からかう様に」言う (p. 47)。既にメキシコが自分の運命の中に宿命の如く横たわっている事 (p. 29) を感じている Kate は、「とてもなれっこありませんわ」と、「熱っぽく」言うのである (p. 47)。

Kate が Ramón を正しく理解する契機は二つある。一つは彼がケツァルコアトルに強い関心を抱いている事、一つは彼が Cipriano を全く怖がっていない事である。ケツァルコアトルはメキシコの神秘と希望を、Cipriano はメキシコの神秘と恐怖を、Kate にとって意味している。Ramón はメキシコの希望と恐怖と神秘の上に立つ人間に彼女には思われ、「多くの事に耐えてゆかねばならぬ人間」(p. 74) である事を知るのである。

二人の間のヨーロッパ人としての理解の底には共にヨーロッパに対する絶望と否定の精神がある事が明らかである。Ramón は Kate を「徹底した拒否精神の中核を心中に深く抱き、世界を爆破せんとする意志をもつ」女 (p.266) と考えている。彼が彼女を Cipriano に近づけようとするのは彼女のそうした精神を Cipriano を通じてメキシコに生かそうとしたからに他ならない。その拒否精神がケツァルコアトルの神秘につながるものである事を彼は自らの体験によって知っているのである。Kate が彼を理解するのは彼自身の人間の自由意志・観念等に対する嫌悪感の吐露によってである。これによって彼女は Ramón が彼女と同じ道を更に遠くまで進んでいるのだという事を知る。男女それぞれ神によって与えられたそれぞれのより偉大な性に従うべきであるという事 (p.81), あらゆる破壊を越えて下に伸びてゆく根と、森に再び栄えよと命ずる言葉とを必要とするのだという事 (p.88), この二つの彼の言葉が真実である事を学ぶのが当座の Kate の試練となる。彼女は Ramón の言葉の中に「宿命の様な響き」を感じるのである (p.88)。彼の言う根を代表するのは Cipriano であり、言葉を代表するのは Ramón 自身であると言えよう。彼の言葉の宿命の様な響きに比べて、「周囲の空気を暗く、しかし豊かに充実したものにし、時には血を癒やすが如く驚くべく人の心をなごませる」Cipriano は、「彼という人間そのものが興味深い」のであって、「彼の言葉は何ら彼自身を表現していない」人間である (p.89)。これ以後、新しい体験、新しい認識を得た後、度々 Kate は Ramón の言葉を思い出してその正しさを確認してゆく事になる。同時にそれは彼女が Cipriano と同じ根になってゆく証しともなるのである。

だが、Ramón という男はケツァルコアトルを通してメキシコに生命を与える大事業に魂を打ち込むと同時に、一人の人間として極限に行きついた絶望感に沈む男でもあって、妻を含めてあらゆる人間との接触を絶ちたいと考える人間である。自分は不可能な事を企てているのではなかろうかという底知れぬ不安と、ケツァルコアトルの事業の中で夜明の明星に共に居る人間を求めたいという遠い願望という、彼という人間の中では同じ根から生じたものでありなが

ら、実際には一人の人間の精神の容量では耐え切れない懸隔を有する衝動が彼を苛んでいる。そこには彼を知ろうとする人間をも近づけない孤立した姿があった。それを彼自身は「私という人間は、私自身の中で怒号する魔性の様なものだ」という」(p. 205)。Kate は彼の裸身を見ながら次の様な強い衝撃を受ける。

Kate は吐息で彼の柔かい静寂なクリームのような褐色の両肩が上がるのを見た。背中の柔かいクリームのような褐色の肌、滑らかな「純粹」な官能をはらんだ肌に彼女は身震いした。両肩は広く角ばっていき分高く、首と頭をきっと誇らしげに立てている。肉付きのよい胸板の厚い豊かな男性の体に彼女は目のくらむ思いがした。思わず彼女はその純粹な男らしい両肩にナイフが突き刺った空想をせずにはいられなかった。その傲慢な疎遠さを打ち砕きさえすれば。

正にそうだった。彼の裸体は孤影悄然と遠く離れて手に触れる事も出来ない遠い時間の中にあっただ。従ってその感触を空想したりするのは、いや穿鑿の目で見ると殆んど穢らわしい事なのであった。突然 Kate は胸の心臓が萎縮する思いがした。サロメもヨハネをこんな風に見たのだ。彼の中にあっただのはこうしたヨハネの美しさだったのだ。まるで遠方の黒い木に僅かな衣をつけた儼裸身をさらしているざくろの実の様だ！永遠にじっと動かず裸身の儼、現代の卑俗な穿鑿してやまない空巢ねらいの様な時代と異ったもっと豊かな時代の違った光を帯びているのだった。

彼の肩にナイフが刺った空想を浮かべた途端、彼女の心臓は苦痛と羞恥に萎縮したが、大きな静寂が彼女を包んだのである。心を沈黙させて鋭い穿鑿の眼差しを捨てた方が良いのだ。人間の穿鑿がましく強しつけがましい自己を抜け出て、領分を犯さない柔かい自己、裸身を恥かしいもの、興奮を煽るものとしてではなく、安価な知識を越えた奥深い柔かな意識の中に花の様に包まれているものとして見る自己に身を委ねた方が良いのだ。

(pp. 194~5)

従って **Kate** は「彼に対して目を閉じて魂だけを開いていたい」(p.196) という一種の祈願を抱く様になる。**Ramón** は彼女にとって地上に於けるあらゆる意味での肉体的な接触を拒絶する存在であり、彼女の進むべき道を示してくれる或る超絶的な存在である事を悟るのである。彼にとって **Kate** はヨーロッパ的自我の残滓を残した脱皮を要する女であり、**Cipriano** によってそれを成し遂げるべき存在である。彼自身はそうした言わば人間としての事業の上に立つ存在と考えられる。**Ramón** の持つ肉体の「純粋な官能は自ら発する暗闇の靈氣 (aura) の中に自立したもの」(p.196) であって、彼女自身のもつ身近かな人間性を帯びた純粋さとは相合れないものであり、そこにロレンスの考える肉体を根源とする完教を可能ならしめる宇宙の実体の象徴が描かれていると見てよい。キリスト教における聖マリアの像が人間地上の男女の世界を離れた信仰の力の根源の媒体であったのと同じ働きを持つと考えられよう。**Ramón** は **Kate** にとって魂の力を教えてくれる存在なのである。この場合の魂の力とは諸々の力の根源となる「暗闇の太陽 (The Dark Sun)」から **Ramón** の靈氣を通して伝わってくるものであり、**Ramón** はそれを通して **Kate** に自己の本質に眼醒めさせる神的存在になる。彼女は後に **Cipriano** との完全な肉体(血)の結びつきの中で、「人間は自身の道と神々の道とを併せ持つ事はできない。いずれか一方でなければならないのだ」と考えるのだが (p.334)、これは自分にとって **Ramón** と **Cipriano** が持つ意味の相異、自分が人間の道をとるべき存在である事の認識であると言えよう。

だがこうした認識を得る前にロレンスは **Kate** に一つの試練を与えている。それは **Ramón** の肉体の生死という危機に彼女を直面させる事である。**Ramón** の傲然とした肉体に対する反抗心からそれにナイフが突き刺った空想をした後、彼女の心臓は苦痛と羞恥の衝撃を受けて静寂に包まれた、という前に引用した描写に隠されている意味をロレンスは現実の出来事として再現している。**Ramón** が暴漢に襲われて重傷を負う事件がそれである。本質だけを見ればこの事件は彼が時空を越えた太古からの生命を担った魂の存在である事の意味を **Kate** が認識するという事である。襲撃に際し先ず彼女は **Ramón** の四肢の中

に「怒りという柔軟な永遠の熱情」を見てとる (p. 305)。そして暴漢との激しい緊張の中にある彼の眼差しに「恐ろしい太古の時代の人間が持っていたに相異なる素朴な初々しさを含んだ不思議な美しさを思わせる或る原始的な純潔な輝き」を見てとる (p. 310)。しかも同時に、恐怖の真只中で Kate は「何か静かに落着いたもの」を心に感じ (p. 306), 「人間には顕現が必要だと思われる」という彼の言葉を銃声の合い間に思い起したりする (p. 307)。ここで Ramón は Kate にとって不死の魂の化身となっているのだと思われる。彼は彼女の中で個人的な接触を求めべき存在を既に越えてしまっていると見なければならぬ。瀕死の重傷を負った Ramón を見て Kate が念じた事は彼の魂が死なない事であった。それは「肉体とは魂の炎であり、魂の眼に見えない芯の上で跳躍したり沈潜したりする炎である」(p. 314) という彼女の或る窮極的な認識に立つ祈りであった。彼女は瀕死の Ramón を通して暗黒の太陽たる神からの太古の生命の顕現の死を恐れたのである。

この体験は Kate を Cipriano に結びつける二つの決定的な契機となる。一つは彼女と Ramón との関係を彼女が最終的に認識する事である。死の危機を辛うじて逃れた Ramón と彼女とが互に見つめ合う場面をロレンスは次の様に描いている。

彼女には彼の魂が再び戻って来ているのがわかった。そしてその魂で彼は彼女を見、認めたのであった。いつもあの奇妙な疎遠な所からであったが、それは彼として避けられない在り方だったのである。(p. 316)

Kate は常に Ramón との接触を最も望んできたのであったが、ここで彼女は彼を個人的に所有する事の本質的な不可能性、というよりむしろその不合理性を認識したと言えよう。彼女は彼の魂の復活を「自分と多くの人々のために」(p. 314) 祈っていたのである。

もう一つの契機とは、事件後の虚脱状態の彼女の中に生じた現象である。

……だが、彼女の内奥には一筋の小さな光が燃えており、それは彼女の最も深い魂の光であった。時折それは沈んで消える様に見えた。すると又再び現れるのであった。

それは **Ramón** が灯したものであった。そして一度び灯されるや世界は空虚に死に絶え、この世のすべての活動が空しく疎ましいものとなった。私の魂！ 私の弱々しい最深奥の魂！ 自分の生命ではなく、その魂の生命を私は生きたい。(p. 320)

これは **Kate** が **Ramón** から摂取した窮極のものであって、言わば彼女の信仰の純粋な芽生えと見なければならぬ。その信仰とはロレンスの考える肉体の宗教へのものであり、その認識の段階から本質的な生命の胎動の段階に入っているのだと言えよう。**Kate** が **Cipriano** の中にその力の本質を目のあたりに見るのはこの後間もなくの事である。

Kate がかつてケツァルコアトルの讃歌に伴う音楽のリズムを聞いていた時、「信仰は蔭を生ずる生命の樹であり、我々は永遠に果実を実らせた樹であり、永遠に信仰でもあるのだ」と感じた事があった (p. 136)。信仰とは生命の樹を信ずる事ではなく、宿命的に避け難く生命の樹そのものである事である。そこにロレンスの考える肉体の宗教の在り方の一つの本質がある。それは決して信ずるという意志的な行為ではなく、本質的な信仰という行為は必然的に生命の樹そのものである事によって必然的に生じてくる様な人間の本来の姿そのものに他ならない。ロレンスはその宿命の中にある事を信仰とするのである。**Kate** がメキシコや **Cipriano** の中に抱いていた恐怖はその生命の樹の証しとしての暗い蔭の中に引きずり込まれていたからであったと言う事ができる。彼女は **Ramón** の霊気の洗礼を経る事によってようやく **Cipriano** の目の暗闇の中に光るものの実体を把む事ができたのである。



この物語は多分 **Kate** がマリントゥィになった所で終わっているべきであったと

考えられる。Cipriano によって永遠に純潔な処女性という神性を彼女が得る頂点で結末にしておけば物語の統一性は守られていた事であろう。ロレンスがそうなし得なかった理由には二つの事が考えられる。一つには、ヨーロッパ人を主人公にしたために純粋な神話として統一する事が出来なかったという点である。ヨーロッパに絶望したロレンス自身が余りにも彼女の中にそれを投影しすぎた結果であろう。彼女の得た神性は退屈なヨーロッパと天秤にかけて選ばれてしまう結果になってしまっている。彼女がマリントゥィになって以後急速に物語は神話としての特質を失ってゆくかの様に思われる。勿論、ヨーロッパ人 **Kate** を中心に据えて常にヨーロッパの退廃を一方に置いて物語は当初から進んでいるのであるから、神話でない要素は当然存在を否定できない。だが、**Kate** がマリントゥィになるまでの物語の経緯の本質は神話としての力の中にあるのであって、だからこそ彼女のヨーロッパ的自我という神話には異質な素材も神話の力に吸収される過程が理解されるのである。**Kate** の神性の獲得という神話的内容と彼女のヨーロッパ精神の自我というものは、少なくともマリントゥィの章以後はその対立を解消させるべき異質の素材であらねばならない。

もう一つの理由にはロレンス自身の男性優位の思想に対する疑念という事である。この事は前者の問題にもつながる事であり、むしろこの後者の方がロレンスにとっては本質的な要因であったのかも知れない。**Kate** のヨーロッパ的自我意識の再燃は男性優位の神話に対する反撥の裏返しと見る事ができるからである。物語の最後に問題の解決を未来にあずけた余韻を残すのはロレンスによく見られる事であるが、この作品に於ての男性優位の思想を神話という完結した内容を要求される形式で表現したが故に不自然な結末となってしまったのであろう。**David Cavitch** は本来短篇的素材であるという意味の事を言っているが、「馬に乗って去った女」という作品がある事を思えば首肯ける事である。長篇小説に於ては問題の追究をしてやまないロレンスの特質が『翼ある蛇』に於てはマイナスの結果を生んでしまったと考えて良からう。

更に大きく見れば、肉体の宗教という本質的な意図を持った普遍性を持つべき神話の中に、男性優位という結論を下す事にロレンスの懐疑を旨とする追究

の本能はまだ安住できなかったのである。その奥には、夜明の明星とか、血の柱、血の谷といった象徴的な表現を多くロレンスが使わざるを得なかった事、又 Cipriano と Kate との性的結合が余りにも Kate の立場からのみ抽象的に描かれすぎていて、現実の人間の間には存在する筈の迫真力を欠いていた事などが考えられる。そこには K. A. Porter が述べている様に、「彼（ロレンス）は結局自分の共有できない神秘の世界を他人として見つめているより仕方がないのだ」という否定し得ない実感がひそんでいたのであろう。Kate がマリンツィになるまでの表面の出来事と彼女の内面に生ずる変化との相関の描写の持つ説得力を宙に浮かせてしまったところにむしろ現代のヨーロッパ人であるロレンスの苦澁を見ておかねばならないのである。

参 考 文 献

- D. H. Lawrence, the New World*, Cavitch, David, Oxford Univ. Press, 1969.
- D. H. Lawrence, the Critical Heritage*, Draper, RP, ed., Routledge & Kegan Paul, 1970.
- D. H. Lawrence and the Body Mystical*, Carter, Frederick, Denis Archer, 1932.
- Dark Night of the Body, D. H. Lawrence's "The Plumed Serpent,"* Clark, L. D., Univ. of Texas Press, 1964.
- D. H. Lawrence, the Failure and the Triumph of Art*, Vivas, Eliseo, George Allen & Unwin LTD, 1960.
- Conflict in the Novels of D. H. Lawrence*, Yudhishtar, Oliver & Boyd, 1969.
- A. D. H. Lawrence Miscellany*, Moore, Harry T., ed., Southern Illinois Univ. Press, 1959.
- The Dark Sun, A Study of D. H. Lawrence*, Hough, Graham, Duckworth, 1968.
- D. H. Lawrence: Pilgrim of the Apocalypse*, Gregory, Horace, Grove Press, 1957.
- The Love Ethic of D. H. Lawrence*, Spilka, Mark, Indiana Univ. Press, 1966.
- D. H. Lawrence, a Basic Study of his Ideas*, Freeman, Mary, Grosset & Dunlap, 1955.
- D. H. Lawrence*, Beal, Anthony, Oliver and Boyd, 1966.